風の鈴

なつく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風の鈴

【Ｎコード】
Ｎ０９２８Ｄ

【作者名】
なつく

【あらすじ】
いじめによって孤立していた少年は、屋上で少女に出会った。

第1話

彼女に初めて遇ったのは、青い空がとても綺麗な日だった。学校の昼休みに、僕はいつものように独りで屋上に行った。昼休みにまで教室にいたくなかったからだ。暗い階段を登って屋上のドアを開けると、まぶしさに目を細める。夏休みも終わって九月に入ったのに、いつまでも暑い。誰もいなかったけど、僕はいつもの場所――屋上のすみに移動した。

鞄を先に置いて、その隣に僕が座る。鞄を開けると、表紙が途中から破けている教科書が目に入った。僕はその教科書を何となく手に取ってみた。

所々、破られたりグチャグチャにされたり、マジックで落書きされたりしている。

まるで、今の自分みたいだ。

そう思うと、涙が込み上げてきて慌てた。

泣くな、泣くな。

自分にそう言い聞かせて、泣かないように唇を噛んでうつむいた。僕が泣いたと分かったら、あいつらはきっと喜ぶ。

その時だった。すぐそばで鈴の音が聞こえた。それから、人の声も。

「泣かないでよ」

え？　いつの間に人が？

「元気出して」

驚いて体を起こすと、僕と同じくらい年頃の女の子が僕の顔をのぞき込んでいた。

僕は、いきなり現れたその子をポカンと見つめていた。あまりに唐突に現れたから、何て言っていいのか分からない。見慣れない制服を着ているのが印象的だった。

「あれ……？」

彼女は、不思議そうに僕を見た。まるで見えてるのか確認するように、僕の目の前で手のひらをヒラヒラさせた。そうだ、何か喋らなきゃ、何か……

それからさらに時間が経って、一言だけ言えた。

「えっと……あの……君、誰？」

その子は驚いた顔をして僕を見た。パクパク口を動かしたあと、やっと喋った。

『あたしのことが見えるの！？』

そりゃあ……と言おうとした時、すごい風が吹いて、思わず目をつぶった。目を開けると、彼女はいなくなっていた。

どこからか、鈴の音だけが聞こえた。

何なんだ……今の……？

第2話

次の日、僕は四時間目終了のチャイムが鳴るのと同時に屋上に向かった。油断してたので、誰かに足をひっかけられて転んだ。ひっかけた奴が僕を怖がらせようと怒鳴っていたけど、振り向かなかった。少し足早に階段を登る。昨日のこと、やっぱり気になる。

屋上の扉を開けて、真昼の光に目を細める。ここまではいつも通り。いつも自分が座る場所に視線を移した時、僕は目をみはった。昨日見た彼女がそこに立っていたからだ。

風が吹いて、彼女のスカートについていた鈴が鳴るのが聞こえた。

彼女もこっちを見て、少し戸惑っていたようだけど、思い切ったように口を開いた。

「あの……こんにちは。あたしのこと、見えてる？」

やっぱり彼女は幽霊なんだと僕は確信する。でも、そんなことどうだっていい。

「うん、見えてる」

僕の言葉を聞くと、彼女はとても嬉しそうに笑った。

僕は、いつも座る所に腰掛けて、隣に鞄を置いた。彼女はその隣に座って、僕たちは鞄の両隣に座る形になった。

僕は鞄を開けて、底や隙間から菓子パンとジュースを二つづつ取り出して、鞄の上に置いた。

「あの、一応持ってきたんだけど……でも、食べられないよね。ごめん」

彼女は、首を横に振った。

「ううん、嬉しい。あたし、このパンすごく好きだったから。いつもお昼はパンなの？」

今度は、僕が首を横に振った。
「学校では、普段食べないんだ」
だって、あいつらに見つかったら何されるか分からないから。この菓子パンとジュースだって、なるべく隠れるように教科書の隙間にねじ込んでたんだ。じゃなかったら、こんなに不格好なつぶれ方なんかしない。彼女だって、僕がいじめられてるって気づいてる。だって昨日、落書きされた教科書見られたもんな。
何だか悲しくなってきた。
「帰りもしないのに、教科書つめた鞄持ってウロウロしちゃってみっともないよね」
口に出してしまうと、余計に惨めになった。
彼女は、しばらく僕の顔をのぞき込んでから言った。
「あたしもね、同じなの」
え？
僕の返事の代わりみたいに、彼女がつけているスカートの鈴がチリンと鳴った。
「あたしは、お昼はお弁当食べてたの。ママが作ってくれるの、いらないって言えなくて。教室で食べるの怖いから、トイレで食べてた。
でも、今日みたいな天気のいい日に、思い切って他の所で食べてみようと思って屋上に来てみたの。そしたらいじめっ子たちに見つかっちゃって。追いかけられてフェンスによじ登ったら、バランス崩して下まで落っこちちゃったの」
僕は驚いて彼女を見た。こんな子がいじめられてたなんて、信じられないんだけど。
「それで、君はさ迷ってるの？」
昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。
「さ迷ってるって言うか、旅をしてるの」
彼女が鈴の音をさせながら立ち上がり、僕も後に続いた。
「ねぇ、あたし、もう少しだけ……夏が終わるまでこの町にいられ

るの。それまで、お昼休みにはここに来ても構わないかな？　あたしのことが見える人って今までいなかったから、嬉しくって」

嬉しいのは、僕も同じだった。

しばらくの間、彼女はお昼休みになると屋上に来てくれた。大したことを喋るわけじゃないけど、一日のうちで、昼休みが一番楽しくて待ち遠しい時間になるのに時間はかからなかった。

第3話

冷たい雨が降った日、彼女はとうとう現れなかった。僕に吹き付けてきた風は冷たくて、半袖を着ていた僕の腕には鳥肌が立った。

秋になったんだ。

空気が入れ替わって、しばらくは涼しい日が続くって天気予報でやってたな。

“夏の間だけ、この町にいられるの”

そう言っていた彼女の言葉を思い出す。

雨が降っていたけど、屋上を歩き回ってみた。隅っこも覗いてみた。やっぱり彼女はどこにもいない。

僕は、彼女の言葉を分かっていたつもりで、実はちっとも理解なんかしていなかった。

次の日も雨だった。彼女はやっぱり現れなかった。僕は昨日と同じように、屋上中を歩き回ってみたあと、いつも雨の日にしていたように、ドアと建物の境目に腰掛けた。

僕、いつもはどうやって時間をつぶしてたんだっけ？

思いだそうとすればするほど、思い出せない。

僕……これからどうすんだろ？　ずっと屋上で一人でいるのかな……。いつまでいればいいんだろ。クラス替えまで？　卒業するまで？

そんなの無理に決まってる。昼休みの一時間だって耐えられないのに。
その日、僕はチャイムが鳴っても教室に戻らなかった。夕方になるまでずっとドアのところにうずくまっていた。

その次の日は晴れだった。
もう彼女がいないことは分かっていたのに、屋上に向かった。僕にはもう、学校での居場所が屋上しかない。あいつらに冗談半分で殴られたところがズキズキと痛んだ。
屋上のドアを開けると――彼女が立っていた。でも、体が半分透明になってる。
鈴の音だけが、変わらずにハッキリと聞こえた。
「もう、行かなきゃならないの」
「うん……そうみたいだね」
喋ったからか、口の中にじんわりと血の味が広がっていく。
彼女は僕に近づいて、僕の顔を触った。
「これ、あいつらにやられたの？」
彼女の指が顔に触れていることが分かるのに、触られてる感覚がない。
「ごめんね、あたし何にも出来なくて」
ううん、君があいつらに何かする必要はないんだ。
「また、来年の夏になったら会える？」
かろうじて、それだけ言えた。彼女が、首を横に振る。
「ごめん。分からない」
どうして？　僕のことがイヤになったの？　その時の僕は、とても情けない顔をしていたと思う。
彼女は、今までで一番困った顔をして僕を見ていた。
「あたし、旅をしてるって言ったよね？　それって生まれ変わるためなんだって死神が言ってたの」
「死神？」

死神って本当にいるんだ。
「うん。トランプみたいなヤツよ。その死神が言うには、あたしみたいにして死んだ人間は、この世界の本当の美しさを知って、また生まれ変わりたいと心から思う時まで旅をすることが許されてるの」
「それで、君はまた生まれ変わることができそうなの？」
信じられない。こんな世界にまた生まれたいなんて。
彼女は軽く頷いた。
「死んでしばらくの間は、とってもつらくて苦しかったの。歩くこともできないくらい。でも、今はだいぶ薄らいだ。きっと、色んな世界やたくさんの人たちを見たからだと思う」
何だか、今の僕のほうが死んでるみたいだ。
「……僕も死んだら、君みたいに自由になれるかな？」
「え？」
彼女が戸惑った声をだす。
「ねぇ、僕も連れて行ってよ。僕はもう、こんな所にいたくないんだ。一人は嫌なんだよ」
しばらくの沈黙の後、彼女は口を開いて何か言おうとした。
その時、突然、黒いもやのような煙がものすごい勢いで立ち上って来て、僕と彼女の間を遮った。
それから、背中にものすごい衝撃が走って、僕は前のめりにつんのめった。
「こんな所でボーっと立ってられちゃ、迷惑なんだよ」
同時に、何人かの笑い声がする。顔を上げるといつも僕に嫌がらせをするヤツら四人だった。
黒い煙と彼女は消えていた。
「お前、最近生意気なんだよね」
「こりゃ、オシオキが必要かなぁ」
あいつらは、そう言ってヘラヘラと笑ってる。
悔しくて、睨みつけようとした時に、鈴の音が耳に入った。

音がした方向に目をやると、彼女がつけていた鈴が風に吹かれてコロコロと転がっていくのが見えた。
あいつらは、きっと鈴を踏みつぶしてしまうだろう。
僕はとっさに鈴を拾おうと体をのばした。
「人が話してる時に何やってんだよ！」
僕の近くにいたヤツが、思いっきり僕の腹を蹴り上げた。口の中に酸っぱい物がせりあがってきたと思ったら、急に視界が暗くなって何も見えなくなった。

最終話

目を開けると、真っ白な空間だった。
「おや、気付きましたか」
そう言って僕をのぞき込んだのは――大きなトランプが顔になっているタキシードだった。
「……！！」
慌てて飛び起きる。
トランプの男は、下半身がなかった。白い手袋をはめていたけれど、そこからのぞいているはずの手首も透明だ。
僕は、彼女の言葉を思い出した。
「もしかして――死神？」
死神の顔になっているトランプはクラブの7だった。
「私はただの説明係ですけど、皆さんそうおっしゃいますねぇ」
顔のマークがスペードの3に変わる。どこから声が出ているのか分からないけど、死神は言った。
「残念ですが、あなたは死にました」
……そうなんだ。でも、ここに来て死神を見た時点でそうじゃないかと思っていたけど。
「いやぁ、さすがサッカー部のエース、田中くん。ひとたまりもありませんでしたねぇ。可哀想に」
サッカー部の田中というのは、僕を蹴ったヤツだ。
「すごい。全然同情しているみたいに聞こえないね」
「ハハハ、よく言われます」
死神が自分の頭に手をかざすと、トランプがパラパラと音を立てた。
「さて、あの少女から聞いたと思いますが、もう一度説明を」
そういえば、彼女はどこに行ったのだろう。
「あの、その女の子は今はどこに……？」

僕が訊くと、死神はまた、軽い調子で答えた。
「ああ。あの少女は残念ながら、地獄に落ちました」
「どうして！？」
自分でも、驚くくらいの大声が出た。死神が、両手を上げて驚いた仕草をしてみせた。
「あなたをそそのかしたからですよ」
「そんなことないよ！」
「ありますよぅ。だって、あなた田中くんに蹴られた時に、こちらのことを考えたでしょう」
図星だった。
「こちらのことを知らなければ、あんな風にやすやすと蹴られたりしましたか？　きっと、もっとよける努力をしたんじゃないですか？」
僕は黙ってしまった。これで死ねば、彼女と同じ条件になると安直に考えてしまった自分がいた。
「それに、彼女も最後の最後ではあなたを連れて行こうとしたんですよ。本気でね。こちらも驚いて連れ戻しましたが……いやいや、まさかあなたが本当に死ぬとは」
最後に、彼女が何か言おうとしたことを思い出した。涙が出て来た。僕はこんなこと望んだんじゃない。
「僕が……僕が代わりに地獄に行く」
死神が、どこからかハンカチを取り出して、僕の顔を拭いた。
「それはできません」
「どうして！？　連れて行ってほしいと頼んだのは僕だよ！」
僕は、死神の腕を払いのけた。
「規則ですからねぇ」
死神は、落ちたハンカチを拾い上げた。
「地獄って、やっぱり辛いところなの？」
死神は、ハンカチをたたんでパンパンとはたいてポケットに直した。

「さぁ。管轄外ですからねぇ。でも、やっぱり地獄っていうくらいだから相当苦しいんじゃないでしょうか？」
「……そんな……」
死神の顔のトランプがパラパラとめくれて、ハートのクィーンになった。
「でも、まだ全部の望みがなくなったわけじゃないですよ？」
「……え？」
死神が、ポケットから鈴を取り出した。彼女がスカートにつけていた、あの鈴だった。
「こちらにも落ち度はあるのです。彼女に生きている人間に接触するなと言う事を忘れたのです。まさか、彼女と同じ境遇で、しかも彼女が見える人がいるなんて思わなかったものですから」
死神が、僕の手のひらに彼女の鈴を落とした。
「あなたも彼女と同じように旅に出るのです。色んな世界やたくさんの人々を見た上で、あなたが本当に生まれ変わりたいと心から思った時には使いが迎えにいきます。その時、彼女にはもう一度旅をするかどうかを決める権利を与えてあげましょう、とのことです」
「……何だか、納得がいかない」
彼女だけが、不利な状況に追いやられているような気がした。
死神の頭のカードがパラパラと混ざり始めた。
「でも、それしか選べませんよ？　それに、私だって責任をとらされるのです。これからは自殺者担当ですよ。言う事を聞かない人が多いらしくって、今から憂鬱ですよ……」
トランプの柄がクラブのジャックになった。
「さぁ、やりますか？　やりませんか？」
「やるよ。それしか道がないんだろ？」
その言葉を待っていたかのように、横の壁の一部が開いた。そこから青空が見える。死神は続けた。
「旅の仕方は、さっき言った通りです。まぁ、基本的に自由なわけですが、生きている人間に接触することは止めてください。こちら

の世界につれてくるなんて言語道断です。あなたにはちゃんと説明しましたよ？　あなたの場合、規約を守らなければ完全に地獄に落ちますからね」
死神の頭のトランプの柄が、ジョーカーに変わった。
「それでは、いってらっしゃいませ」

目の前には空が広がっている。下には、僕が生まれた町が見えた。
僕と彼女は、もう二度と会えないのかもしれない。
こんな世界に美しさなんてあるのか分からないけど、それでも君が旅の途中で感じていたものを僕も追いかけてみるよ。
だから待っていて。希望を捨てないで。
手の中の鈴をそっと握りしめて、僕は一歩踏み出した。

糸冬

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0928d/

風の鈴

2010年10月8日15時34分発行